
乙女ゲーマーな彼女

詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女ゲームな彼女

【Zコード】

Z9944Z

【作者名】

詩音

【あらすじ】

『オ色兼備』その言葉がピッタリな生徒会長である彼女。それに対して、俺は一般生徒。俺たちに関係性なんて、今も、これからも、ないもの。そう考えていた。だけど、ある日偶然向かつたゲームショップで生徒会長を見かけてしまい、彼女の秘密を知ってしまう。そして、俺と会長の妙な関係がスタートするのだった。

〇回目 プロローグ

才色兼備なんて言葉がぴたり合うような人間、この世界に本当にいるのかと考えたことがある。どんなに素敵な人でも、多少なりとも難はあるものだ。

それは、テレビを見ていてもわかることだろう?

どんなに綺麗な人でも、性格がいいとは限らない。

どんなに頭のいい人でも、容姿が端麗とは限らない。

だけど、そんな考えの俺でもこいつは本当に完璧なんだろうなと思つてしまふ女がいた。

彼女は田舎の学校の生徒会長で、俺とはクラスも違う。だけど、彼女の話が俺のクラスまで届かない日はなかつた。まあ、一クラスしかないから普通かも知れないけど。

それでも、彼女は完璧だった。噂ですら、彼女の魅力を伝える手段としかなつていない。彼女の批判をするような人間なんて、ゼロに等しかつた。

例えば、生徒からの要望。

彼女はそれが可能なことであれば、一人で校内を駆け回り、それの実現を求めた。そして、実際に実現させた。

それが不可能なことであれば、要望を出してきた人にテキトウな返事をするのではなく、その人がどうしてそれが不可能なのか理解できて、後々色々なことを思つてしまわないような完璧な返答を返した。

異常な行動力、そして、そんな彼女の行動を支えてくれる人材を集め、それを率いるリーダーシップを彼女は持っていた。

そんな人間が、どうしてこんなに田舎の学校に納まっているのか、とか思ったこともある。

だけど、そんなこと考えたって俺が知ることは出来ないもので。俺に出来るのは、遠めに彼女の活躍を見ていることくらいだった。

成績も全国トップクラス（うちの学校で勉強していないところも更々と解いてしまう）、美女というわけではなく、可愛い寄りだが、それもこれから綺麗になるのだろうと期待を持てるような可愛さ（）彼女と一緒に市内に出かけたと話をしていたクラスメイト曰く、男性から声をよくかけられるそうだ）、身長は157cmと小柄だが、それを感じさせない何かを持つていた。

だから、これは本当に偶然なんだ。

俺は、何も悪くない。

たとえ、ゲームショップで会った彼女が左手にゲームを持って、右手の人差し指を俺に向けて、泣きそうな顔をしていたとしても、俺は悪くないのだ。

「あ、ああ、あんた……学校の……」

「……どうも」

泣きそうな彼女……生徒会長は、フルフルと身体を震えさせ、左手からゲームを落とした。カシャンと軽い音がその場に響く。

ああ、俺、どうしたらいいんだろうか……

これが、俺、時一時と、彼女、生徒会長である少女岡本花火の始まりだった。

1回目 ゲームショップにて

何が原因で、俺はこんな日にあつているのだろうか。

日曜、暇を持て余していた俺に、母さんが市内に買い物に行くと
いつので来ないかと誘つてきた。

そして、俺はその誘いに乗り、四十分ほどかけて車で田舎の町か
ら市内にまで遊びに来たのだ。

母さんの目的はDVDを借りに来たことだったが、俺は特にDVD
に興味がなかつたので、一人レンタルショップの正面にあるゲー
ムショップに来ていた。

ゲームショップの中は人も多くなく、店内を俺はテキトウに歩き
回っていた。

そんな時だつた。彼女を、見つけたのは。

最初は、誰かわからなかつた。

ふらふらと歩いていて、角を曲がつた場所で、じつとゲームを見
ている少女。

160cmもなさそうな小柄な可愛らしい少女だつた。

俺は、最初は、「可愛い……と、ぼんやり考えただけだつた。だけ
ど、その少女をどこかで見たことがあることにふと気がつく。

そこで、どこで見たかなあ……と考えた。

その結果、俺は一人の名前を頭に浮かべるのだ。

岡本花火おかもとはなびという、才色兼備なうちの学校の生徒会長を。

最初は、そんなわけがあるはずないと考へた。だつて、普通に考へてわかる話だ。学校で習つてもないような勉強をスラスラと解いてしまう様な、生徒会の仕事を持ち帰つて一人ですべてこなしてくるような人間に、家でゲームなんかする時間があるわけがないことくらい。

だから、こんなところに彼女がいるわけない。これは、他人の空似だ。

そう、思うことにしたのだ。

なのに、そんな俺の善意を彼女はわかつてくれなかつた。

品定めを終え、一本のゲームを手にした彼女は俺の方向を向く。多分、レジに行こうとしたんだる。ニコニコと笑う彼女は、かなり可愛くて、魅力的だつた。

そう、俺が、もう少し早くここを離れておけばよかつたんだ。だけど、それが遅れてしまい、彼女と顔を合わせることとなる。

ここで、冒頭に戻る。

「あ、ああ、あんた……学校の……」

他人のフリをしてくれてもよかつたのに、俺に人差し指を向けて、彼女はそんな言葉を発してしまつのだ。

流石に、ここで無視をするわけにもいかなくて、「……どうも」と俺は返事をする。

そして、彼女は笑顔から一転、泣きそうな顔をして、左手からゲームを落とす。カシャンと軽い音が響いた。

それから、なかなか動かない彼女。俺はどうしようかと考えたが、とりあえず落ちているゲームを拾おうとしゃがんで手を伸ばした。

「だ、駄目！！」

「え？」

そう、彼女が叫んだが遅かつた。俺は、ゲームを手にしてしまった。

そして、タイトルを見てしまった……『恋の処方箋』と書かれている。

ついでに、主人公らしき少女が滅茶苦茶キラキラした美少年三人に囲まれたパッケージも。

……これが何のゲームなのか、なんとなく察することが出来た。これは、あれだ。

乙女ゲームってやつだ。

所謂、ギャルゲーの反対の物だ。

ギャルゲーは基本的に男性に販売することを目的とした、男の主人公が可愛い女の子と恋愛するゲーム。

乙女ゲームはその逆、つまり女の主人公がかっこいい男の子と恋愛するゲームだ。

……なんで、そんなものを生徒会長が……

いや、そりや、プレイするために持ってるんだろう。買おうとしてたんだから、当然だ。

でも、会長がこんなゲームを？

正直、考えられなかつた。

なら、間違えて買つたつてことは？

……いや、物凄くじつづき品定めしてたんだった。

そんなことを考えながら、じつとゲームのパッケージを見ていたら、パシッと軽く頭を殴られた。痛くはないけど、びっくりした。

呴いたのは、勿論生徒会長。

会長は泣きそうな顔で、可愛い、黒目がちな瞳で俺を睨んでいる。そういえば、いつもは低い位置でツインテールなのに、今日は高い位置でポニー テールなんだな。

「や、そんなに見んなつ！」

また、妙なことを考えていたら手からゲームを取られた。

会長は、ゲームをぎゅっと胸元に抱き寄せる。

「……な、何のゲームかわかった？」

会長は恐る恐るといった様子で俺にそんなことを尋ねてくる。ここで、ノーと言つても多分会長は信じないとなんとなく俺はわかつていた。

仕方ないので、素直に頷く。

「つ……」、「これは、あれよ！ あ、あくまで私の暇を潰すための道具で……い、息抜きみたいなものよー。」

その言葉は、どう聞いても趣味でやつてることしか聞こえなかつた。だって、忙しい会長がわざわざ暇を見つけてゲームをしてくると、いうのだ。

会長なら、読書でもしているかと正直想っていた。

「いや、いいよ。好きなんだろ？」

「つづつ……す、好きとか、そういうのじゃない！」

必死で否定しているが、大事そうに抱きかかえられたゲームを見てみると、会長の言葉が眞実とはとても思えなかつた。

「いや、いいです。俺、人には言つませんから。それじゃあ、さようなら会長」

そう、会長の言い訳なんて聞く必要はないんだ。

知つているけど、知らない。もともと、俺と会長に深いかかりはないんだから、ここで話はお仕舞いにするべきだ。それで、正解だ。

ナツツ思つて、俺は会長に背を向けたのだけれど……

2回目 よくわからない展開

ガシッと、会長は俺の腕をつかんだ。
いやいやいや、何でつかむ！？

表情には出してないはずだが、俺は内心結構焦っている。だつて、
当たり前だろ？

学校では一切はなしをしない、高値の花のような生徒会長様に、
休日に偶然あって、多分、見てはいけないことを見てしまって、所
謂、秘密を知りかけていて、それを俺はなかつたことにしようと提
案しているのに、会長はそれでは駄目なようで……後ろを向いて、
話してもらおうとすれば、綺麗な瞳に涙を浮かべて、俺を睨んでい
た。

顔、近いし……可愛いし……

ここまで近くで見たのは、流石に初めてのことだ。なんというか、
会長つて本当に整った顔をしていると再認識してしまった。
多忙と有名なのに、肌の手入れも怠っていないようで、一キビな
んか一つもない。化粧も、しているようには見えないが、目はとて
も大きくて、唇はピンク色……って、俺は何を考えてるんだ！

邪念を振り払い、「か、会長？」と一度呼んでみる。すると、会
長はなんともいえない、困ったような表情を見せた後、

「……み、られたなら仕方ない……」
「は？」

「み、見られちゃつたから、もう仕方ないって言つてゐるのよ……！」

あ、あんた……じゃなくて、時！

「え……名前、知つてんの？」

時、と呼ばれて、少し、驚いてしまった。まさか、会長が話もしたことがない俺の名前を知つているとは思わなかつたから。

「あ、当たり前でしょ。学校、全校で何人だと思つてんのよ」

まあ、それもそつか。

俺の通う学校、つまり、会長が生徒会長を勤めている学校は田舎の本当に何も無いところにある公立高校だ。

生徒は、基本的に町内か、隣の町に住んでいるものばかり。

なんで、少子高齢化の波で生徒数も減少中。一学年一クラスしかない。

だからまあ、会長が俺の名前を覚えているのも普通といえば普通だ。俺だって、流石に学年分くらいは名前を覚えている。

「何よ？ 時じやなくて、一時つて呼んで欲しいとでも言つの？」

「いや、それは特にこだわり無いです……」

そう、時一時、それが俺の本名だ。どうして時という漢字を一度も使いたかったのかは知らないが、まあ、嫌いではない。苗字も、名前も。

だから、どちらで呼ばれても構わないのだが……会長に卜の名前で呼ばれるのは、何だか照れる気もする。

「そう、なら、時でいいわね。そ、それで、時！」

「は、はい？」

「……」
「どうか、俺なんで同級生に敬語使つてんんだろ……」
無意識のうちに、口から出ていた。なぜかわからないけれど、敬語で喋らないといけない気分になつていて。年齢も同じなんだし、タメ口でいいはずなのに。

「あ、あんた……き、今日見たことは、他言無用よ」
「……いや、最初からそのつもりで……」
「う、うるさい！ そ、それで……見ちゃったんだから……協力
しなさい！」

反応できなかつた。

だつて、意味がわからなすぎるから、どういう展開だよ、これ。
協力つて、何のことだよ。というか、会長つて結構キツイ性格だ
つたんだな。才色兼備……ではなかつたのか。いや、まあ、そんな
に完璧な人聞いても気持ち悪いけど。

「は、話を聞きなさいよー。」

「え、あ、はい……つて、いや、何なんですか！？」
「きよ、協力は、協力よ」

いや、だから協力って……、と聞いひとしたときに、「携帯を買つたときから何も変わっていない、聞きなれた音声が響く。俺の、携帯だ。

どうしようかと思って、会長を見ると、「や、やつだと取りなさいよ」と言われた。なので、ポケットから一年ほど使用している薄い青色の携帯を取り出して、通話ボタンを押した。

相手は、レンタルショップに先ほど向かつた母親で、レンタルをしたから、帰るというものだった。つまり、俺も会長の前から去ら

なければならぬ時間つてことだ。

「会長、俺、そろそろ帰らないといけないんすけど……」

「え、あ……そう……そうね。と、時！」

「はい？」

「携帯つ、貸しなさい！ それと、これ、持つておいて！」

会長はそう言いながら、俺にゲームを差し出した。俺は、とりあえずそれを受け取る。

すると、会長は次に手のひらを差し出してきて、多分、携帯をここに乗せようと、言つことなのだろう。何をするのかよくわからなかつたが、俺は会長の手に携帯を乗せた。

すると、会長は自分の携帯らしきものを、肩にかけていた白いバッグから取り出す。会長の携帯は、鞄同様真っ白だった。

そして、勝手に俺の携帯を開き弄る。

何してんだ、会長……と思つてしまつたが、見られて困るものも特に無いのでそのまま見ていた。そして、会長は……ああ、そうか。赤外線通信だ。

会長が自分の携帯と俺の携帯を合わせてゐるのを見て、何をしているのかやつと把握する。そして、通信はすぐに終了したようだ、会長は俺の携帯を再度少し弄つた。そして、ズイツと俺の目の前に画面を見せ付ける。

「岡本花火で登録してあるから……メールの返信はすぐにしてよー！」

「え、あ、はあ……」

「それじゃあ、私も帰る！」

会長はそう言い残して、俺の手からゲームを奪い、変わりに携帯を差し出してから、レジのほうへ向かつていった。

レジは、出口と逆の方向にあるので、
「でわかれ、店を出るのだった。
俺まだつまんぬ会話とはな

3回目 メール

会長がゲームショップでいる姿を田撃してしまった翌日のことだ。目が覚めた後、俺が最初に考えたのは、あれは夢だったんじゃないかということだ。

冷静になつて考えてみると、どう考えてもおかしいのだ。あの忙しそうな会長が、ゲーム、それも乙女ゲームにのめり込んでいるなんて、どうかしている。

だから、あれは全部夢の話。そう、それでいいんだひとつと考えた。

なのに、それが夢ではないと裏付けるものがある、

それは、昨日会長に半ば無理やり交換させられたアドレスだ。

携帯を開いてみれば、メールが一通来ており、差出人は、岡本花火。どう見たつて、それは会長の、名前だ。

「ああ、 そつか……」

そのメールを見た後で、すぐに昨日の夜のことを思い出した。そうだ、俺は昨晩、会長とメールで話をしていたのだと。

夜、夕食を終えて、八時頃から自室で何をするでもなくぼんやりと過ごしていたら、携帯がメールが来たことを告げた。

俺にこんな時間にメールをしてくるなんて誰だろうと思いつながら

携帯を見てみれば、メールの差出人は、岡本花火。

どうしようかと思いつつ、メールを開けてみれば……正直、後悔した。

だつて、おかしいだろう。

絵文字、いや、改行の一つもなく、ダラダラと書かれたメールなんて。

読む気が一瞬でうせてしまった。

『せめて、改行くらいしてくれ……そう、心の底から思つてしまつた。

しかし、俺はそれを必死で読んだのだ。内容は以下のよつなものだつた。

『時、私の秘密を知つたわね。とりあえず言つておくけど他言無用だから。人に言つたりしたら、時のこと絶対に許さないから。この他人つていうのは、姉のこともだからね。あの人と言つたりしたら、絶対に許さないから』

姉、というのは、色々とわけありな会長の義姉のことだろう。わけあり、というのは現在会長は高校三年生で、姉が高校にいたらおかしいのだが……いるのだ。会長より二つ年上なのに同級生の姉が。といつても、この姉は留年しているわけではなくて、入学が遅かったのだ。その理由は、流石に俺も知らないけれど。
そして、この姉というのが凄いのだ。

俺の通う学校（嶺高校）^{みねこうこう}はクラス数が少ない。が、一応その少ない二クラスでもクラス分けをされている。

一年次からのクラスわけで、片方は商業、もう一つは進学だ。

そして、俺は商業コース、会長は進学コース、そして、会長の姉

は商業コース。つまり、俺と同じなのだ。

だから、俺はほぼ毎日会長の姉と顔を合わせているのだが、なんとか……会長に負けず劣らずの美女ではあるのだが……変だ。何が変かと聞かれると、もう、全部としか言によつが無い。

なんで、まあ、会長も姉とはそれほど仲がよくないのだろう。それに関して、俺は触ることは止めておいた。デリケートな問題でもあるかもしれないからだ。

大体、俺は姉とは話さないしな。
ええと、それで続きだ。

『それで、言つて置くけど学校でゲームの話を持ちかけたら許さないからね。あでも、何か面白い乙女ゲームがあつたらすぐにメールしなさい』

「いやいやいや……乙女ゲームはしないですよ。ギャルゲーはするかもしねりないけども……」

流石に、男の俺が乙女ゲームをするのは……あまり、想像したくない光景だ。ギャルゲーもしたことはないけれど、まだ、俺がやっていてもおかしくないジャンルだろう。

『あでもね、普通に話しかけるのは止めないから。あくまで、友達としてはね。私は忙しいから話を聞いてる暇も無いかも知れないけれど。そうそう、私が忙しいのは知っているでしょう？　だから少し、手伝って欲しいのよ。これが、今日店で言つた協力ね。私、忙しくてなかなか買い物に行けないのよ。だから、私が頼んだらゲーム買いに言ってくれない？』

「……」
「え」と一人で声を出してしまった。

その、声をかけて言ことこののは、少し嬉しかった。が、それとこれとは話は別だ。

だつて、その後に書かれている乙女ゲームを買つてくれといふのは、流石に……。俺は、姉も妹も……といづよつ、兄弟がいないのでそんなものを一人で買つているのを知り合いに見られたら、いや、普通に店で他の人に見られても、おかしいと思われてしまいそうなものである。

それだつたら、まだ会長が自分で買つうが普通だらうと思つた。なので、これに関して一度メールを送つてみると、すぐに返事は届いた。

『馬鹿ね。買ひに行けとは言つてないでしょ。時は、ネットショッピングとか使つていないので? 私は、それをしたら姉にばれるから出来ないのよ。だから、時がしてくれたら助かるといつているの。そんなこともわからないの?』

「そんなこともわからないの? どんだけ、上から目線なんだよ……」

人を引っ張る力、リーダーシップを持つているとは思つていたが、ここまで上から目線で命令されるとは思わなかつた。いや、向こうはこれを無意識にしているのかもしれないけれど。

しかし、ネットか……。

それなら、確かに俺なら出来る。というかまあ、ネットで買つと安いしな。

なので、『ああ、ネットね。それなら、出来るよ』と返事をした。すると、即効で、本当に、一分も経つていなかつた。そんな速さで、返信が来る。

『ありがとう!』

……正直、少しドキッとした。

だって、さつきまで『ー』なんて一度たりとも使わなかつた。それに、異様なくらい上から目線だつた。

なのに、簡単にありがとうと送つてくるなんて思いもしなかつた。

上手い、飴と鞭の使い方だ。

断れない、状況を簡単に作り上げている。

それで、なんだかやけに照れてしまつて、俺はここでメールの返事を止めた。まあ、照れただけじゃなくて、送ることがなかつたのも理由だ。

そうして、風呂に入つたり、歯を磨いたりしてから、俺はベッドに入るのだった。

明日から、会長と俺の関係は何か変わつたりするのかな？ そんなことを、思つて。

そして、翌日だ。

俺は平日はいつも六時くらいに起きているので、今日もそれを守つた。

携帯には、会長からのメール。

内容は……

「何様……」

つい、本音が漏れてしまった。
だって、本文……

『学校に七時に来なさい』

来なさい、って……。どんだけだよ。
しかし、断るのもあれかな？ と考えてしまい、とりあえずそつ
さと準備することに決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9944z/>

乙女ゲーマーな彼女

2012年1月5日20時54分発行